

GO GLOBAL Interview

奥 龍将さん（日本文学科（平成 23 年卒）／株式会社 スマイリーアース代表取締役）

「GO GLOBAL Interview の記念すべき第1回は、本学在学中、陸上競技部に所属し第87回箱根駅伝に出場した奥 龍将さん。奥さんは現在オーガニックコットン製品を製造販売する企業の代表取締役として、綿花の原産地であるアフリカ東部ウガンダ共和国と日本を行き来する日々を送っています。」

—自身が経営される企業の取組みには「フェアトレード」「サステナビリティ」などグローバルなキーワードが詰まっていますね

奥 龍将さん（以下、奥）： 日本社会にも「フェアトレード」や「サステナビリティ」などの用語は存在していますが、今後はその奥にある根本に立ち戻って考えないといけないと思っています。我々の「モノづくり」を可能にしているのは、世界のどこかで原材料を供給してくれる人々がいるから。その人々に感謝して、当たり前にしなければならないのが「フェアトレード」であり「サステナビリティ」です。企業は用語を多用するだけでなく、まず現地の人々の目線により近づいてゆく努力をすることが必要です。

—そのような考え方に至った背景にはどのような経験が？

奥： 現地に行くまでは、誰がなにを育てて、どういう時間軸で働いていて、どういう苦しみや難しさがあるのか、全くわかりませんでした。「なにごとにも実際に経験する」これは陸上競技での経験が根底に生きています。陸上競技経験者と未経験者からのアドバイスは全然違います。自分でうっすらと気がついていることを、経験者から自身の経験値に基づいてアドバイスすると、それは受け手の選手の心にすとんと落ちるものです。

—なるほど

奥： 手にマメをつくっていない日本人がひょっこりやってきて、綿花の品質についてアドバイスしても説得力がない。先進国から来て上からモノを言うことだけは避けたかった。まずは現地に行って、共に働き、心を通わせるところから始めました。作り手たちの意識を感じることで、自分のモノづくりの改善にもつながりました。

—実際に経験することが大切。私の心にもすとんと落ちます

奥： 労を惜しまない。実際にやってみる。そういう姿勢が足りなくなっている時代です。行った気になる、やった気になる、というのはバーチャル世界が広がっている現代社会の「ロス」だと思っています。同時にこのグローバル時代においては、止まって考えてもいい結果は得られません。とにかく前に進み、自分の足でヒントを見つけに行くことが絶対に必要です。

—就活生のためにグローバルビジネスの話をもう少し

奥： ウガンダで農業を営む人々の生活を現地で経験するにつれ、現代日本人がこれを代わりにできるか、と問われると「できないだろうなあ」と思います。だからこそ、日本は日本が必要とする産業を基幹産業としているアフリカ諸国との

ビジネスに力を注ぐべきだと感じています。日本は彼らの文化を真に理解した上で、彼らが守るべきものを逆に伝えてあげる、あるいは同じ目線で共に次世代につなぐ取組みを一緒にやってゆける国になることが大切です。

—グローバルな視点でビジネスを展開してゆくことが、ひいては少子化を抱える日本国が生き残る道となる？

奥： これまでの日本社会は消費社会でした。なぜ「使い捨て」社会だったのか。ビジネスをしないといけないからです。でも日本のゴミは本当に多い。このまま「もったいない」を続けていくのが日本社会のためになるのか再考の時期にきています。「いいものは長く使える」、これこそ日本の美学だとも思います。このように、グローバルな目線で次の社会と世界を描きながら、自分の職を見つけてゆける人材になってほしいですね。

—そのような考え方も社会人になってから身に付いた？

奥： いいえ、大学時代に専攻していた伝承文学に答えがありました。伝承文学は「伝承」することが大切ですが、その地域に本当に必要なものでなければ伝承されないのです。時代が変われば価値観も変わります。でも守らなければいけないルールみたいな「本当に大切なこと」は変わらないですね。だから物事の「本質」に新しい価値創造をしてあげることこそが、私たちがすべきことだ、と学びました。

—駅伝や伝承文学、大学時代の経験が生きていますね

奥： 大学時代は自分のやるべきことを見つける時間、自分が何者であるかを見つめなおす時間です。生まれた場所や自分のルーツを探ることで、自分の現在の立ち位置がわかるので、学生さんには大学時代の時間をどうか有効に使ってほしいと思います。

—学生から「やりたいことが見つからない」と聞きます

奥： 先ほども述べましたが、グローバルな目線で次の社会と世界を描きながら自分の職を見つけてゆくといいと思います。「自分のやるべきこと」がわかったらそれが天職ですし、将来やりがいを感じながら仕事ができれば、それがベストですよ。

—グローバル社会を生きる國學院の学生へメッセージを

奥： 社会は結果主義です、それはブレないで自覚してほしい。自身のことで言えば、箱根駅伝に出たか、出なかったか、で全然違ったと思います。ひとつなにかをやりきった経験は強い自分を作ります。将来追い込まれた時に強い。これから先、どこに行っても競争はあります。だから在学中にも勝負にはこだわって、結果にはこだわって、自分自身を高めてください。同時に、失敗した時はその失敗さえも経験値として自分に吸収する余裕がほしいですね。がんばってください！

グローバルな物の捉え方の原点が、駅伝や伝承文学など一見「グローバル」とつながらないような大学時代の経験にある。これこそがグローバル人材になるための極意です。グローバル人材に興味のある学生さんは、ぜひ国際交流課が出している「GO GLOBAL」パンフレットをご参照ください。

2016年（平成28年）7月26日